帝鑑圖説

六

自十一巻至十二巻

内閣文庫
番號 和 36295
冊數 6 （ 6 ）
函號 子 253 10

Kodak Gray Scale
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
C Y M
© Kodak, 2007 TM: Kodak
colorchecker
x-rite
MSCCPPCC0411
MSCCPPPE0411

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

帝鑑圖説巻第十一目録

金蓮布地　齊乃宝巻
捨身佛寺　梁の武帝
縱酒妄殺　齊の高洋
華林縱遊　齊乃主緯
玉樹新聲　陳の叔宝
剪綵爲花　隋の煬帝
遊幸江都　隋乃煬帝
斜封除官　唐の中宗
觀燈市里　唐の中宗

帝鑑圖説巻第十一

金蓮布地

斉乃国乃あるじに宝巻と申せしありけり此宝巻
淫乱にしてたはふれをこのミてまつりごとのことを志らずして
よろづのおごりハかぎりなく府庫の財をつくし我ほしいまゝに
身持ハかりごとも衣服いたるまで世にめづら
しきものをもとめておやかなりけるがなかりされ
ども其中一乃清きさきに潘妃と申おもひせしが君乃
てうあいすぐれおはしあまり宝巻黄金をとり川のまへん
おかれたり御殿のまへにはなをさきみだれ潘妃を
佩よ人はさあゆまられけるとかや宝巻はくく流

らんじ御よろこびましくての給ひけるハ寔(まこと)
かゝる潘妃(はんひ)があゆみくもまたぐひなき事なれバ
あゆむあしのあとまでもこがねのれんげをしやう
ぜらるゝなりとて淫楽(いんらく)とそよろこび給ふかぎり
なしかくのごとくにおごらせ給へバ近臣(きんしん)寵愛(ちようあい)の
人々もみな君のまねし給ふにならされて栄華(えいぐわ)にほこら
ざりけるハなし商人(あきんど)までもたがひによくせんおごりく
ものゝ百姓(ひやくしやう)にいたるまでかけものゝたからをうばひ
とりあげおごらじとていくさをもおこなひて
よみ百姓(ひやくしやう)ふとさきのふかうおとろへ人の嘆きとぞなげく
も涙ひまなく給ふ海よひいでておごり申すてい

なこがね進らすべきさけぶなり一人のかにより志をしんぜん
ふらんのみだけさのかどやせちろかありとかや救ふに寄(とう)
巻(まき)ころるふそありけり給ひてよりまいつか二年もたゝぬ
ほどしに王琳(わうりん)國(こく)とやしてのちのあとゑをおろかして
蕭衍(せうえん)をおさちら梁(りやう)の國をとうぞひとられ給ふとかや是
をよりくあんじちるにはつ○に君(きみ)をもとめさでまつりわざ
まひとるに寿によぶ事にかりなりけり而已

金蓮布地
潘妃

捨身仏寺

梁の武帝と申してみかど一人ましませり。彼の御門仏法をうやまひ給ひて、わけて信にましましけるが、同泰寺とやらへみゆきさせさせ給ひて、あまたの僧を召し集め給ひて、あまたの人をあつめて清衣をぬぎすてて、けうらうをもちやうして給ひて清浄大捨施の法をおこなひ、仏戒をたもち給ひ、男女をも禮拝して、終日家隊によふして食を勧めたまひ、亂ゑを、うちに座をうつして、小乗にかへり天子はあらずをさめて、常住のこゝろをとかんじけるが、講堂の法座に上りみづから経論をあまた備俗大衆にあまた涅槃経を

とし経へりされども佛家の志やくそんに人志てさ川
あかさ孫共むかし免かりぬといへども妙那倶えも
くちむしてはのませうはふあつとうやくこま生
死の二川なといひて涅槃經といふ書あり武帝此經を
はなはりしんじなふゆへ大方の民あやうしと兇経ふ
志つ海よりけ川まも国下ちれもちれたりて武帝乃
らく経海よひ川くちうぎんのそしるなさり佐勇を
まそく佛あるかりせ経ふあるこまりくもなべき
とそもあかりち錢十万貫をとらざして佛前りこれを
そなへ武帝を續せし表狀りいていさめをなし君
ぶみ御りは文中しへり色ら唆よりて國家乃政を

きこしめされ給へりしかど之れくはいさめをおかせし
りぞし武帝はいさめよきゝずひあまつさへ殺よさんと
あらくさいはいくど思ひ之度までいさめをなし武帝
はいさめりあへてはあふ宮中へつかはし給ふ
それ佛家は父母妻子をすてゝ我が身をすてゝ家を出る
ちいさきかたき川事なれ夷乃をしへにして
天下をぬりはおさまりあらじ凶らくあらう那
武帝も宗廟社稷のおりんずなき事をもつて又
國家だんらんをおこさむなき事狀ものぞかんぞ
身を佛あるにをてゝそのいさしめにたよりひ給ふ
事ありてもあまりけりまた武帝乃子孫侯景は

しかれよりくりて國家をうばひかうぶれ臺城にて餓死して
しかるをもつてなんぞ仏のたすけあらんや

縦酒妄殺

齊乃国乃主に高洋と申す君あり御かたちは高洋清子に
酒をこのみ風なひてあけくれ志ゆえんにひまもなし
剣しさけぶふかくもぎぬまでもあくぎやくぶだうを志
給ふ事多くして人をめすにあやしされど御殿乃庭
中に人をにる鑊といふものをすゑて人をいれそぶらうそ
其外のいろいろ乃ほだをおきて御酒によひ給ひて
なふ河へ手つから人をおろさせ遊ばしてあそびたまふ
ぶれまし悔せりしかし宰相乃官よ楊愔と申臣下
ありしがさらにまことにしくて清き人をさら給はせ
給ふをあまたゝびあまされめおそろしのそれ中にその

ゆうがおをうしなひてしざいにおこなふべき者なれども〳〵
庭訓(ていきん)乃かくしごとをあらはしめおさまれば咎(とが)はゆるして倭漢(こうざいな)
因(いん)といへり悪酒(あくしゆ)はまよはせなまゑひて人をあやまらさんと
のおもふとてもよしわがいのちこそのめしうけるをいごしくて
身(み)の乃あり様(さま)にしてこうごうりはなくあんまりうり
それ人の命(めい)ハ地(ち)ろうかなりありふだうらぞ盆ととの
いう酒(さけ)の飛(ひん)入(にう)ありとも三(さん)度(ど)きられせんどうどうをし
又度(ど)罪(ざい)へそうもんしてさて悪(あく)所(しよ)ろをやめし身(み)は
夏乃閻(えん)魔(ま)王(わう)も悪(あく)乃行(ぎやう)とうゆてざいにんを見て車(くるま)よあらう
おりさ場(ば)きひてなんだをながし思ふ事なれ人乃
いのちをとらる志あはせどもなきをあゆまる終(おは)りにゆく

あり志が国よ新(しん)乃高(かう)洋(やう)ハあくぎやくぶどうにおし
悔してあまるしやがうにん人をころしけるをはくらう
おもふ事なき百性(しやう)をいしなまでころりしのぎと
うらみざんやされどふ也高洋(かうやう)ぐじめいくるために
はらせのふとせえしらおをはなしなみをあらわれと
まうりがく浅ましくおこなひおもふせいりたた後
酒(しゆ)をしのまたのふゆへそのはうらしらみさせて
はあふぶらう乃ゆえとなりせおもふ事地し見たくも
お浅ましう〳〵

縦酒妄殺
楊愔
北齊主洋

華林経説

神乃国にあるとき小締といふ君あり御子に琵琶をひく
事をおしへまゐらせ給ひていはくこれ曲をひかせ給ふ声
ゝはいとおもしろしとてきく人のあはれになりて感じ
きもふかくしてあくまでまかりてありけり御覧あれと
名付て無慈の曲といふなりされど無慈乃曲となづけ
給ふ事はこれ此の曲をきいてなげくことなきゆゑの
よしなりけりうまいらすなかにも枝にだんこん又君を
なづけて無慈乃天子と申奉りあるとき君此林園乃
うちにありて貪見桟とかきて一つ乃貪欲をたてゝ
津子にいはれけり欲よく海ならし君みてあはれ

いしゆうを殺されて乞食乃ものゝごとくさう夜をうへ
あそこかしこめぐりて食をこうてあそばれけり
かくのごとくあそびありけるはしてありひまつり
たのしみを翫びはりに及む事はゆるされ候はまし
その身はからずして国をうしなひ給ひけり

玉樹彩毫

陳の國のみかどに叔寶と申せしは酒色をこのみ
そのおこりおもひてよりいんらんにおごりをいたせり
あのミちの事などへをやうにもあしきこと多に
三つの臺をたてられ一つは臨春閣と名づけ一つは結
綺閣といひ一つは望仙閣となづけいづれもかざりて
なのめならざる事數十丈ひろさきこと數十間ばかりまで
海とやらんかんなど沈香梅檀乃木をもつて作りはしく王
又うちのかざりみな金玉をちりばめてまことに
なる事を近代いまだためしなし又叔寶はなはり
おんききよくをこのみまよひて宮女のうちに文学ある

人をこゝろミ女学士と名し又閣下のうちに文学ある
ものは総孔絶が名ごひをこゝろミいざしてゆるして
宮中へめされけ二人のものを押官となされけれは称り
これよりゆふきやう乃ともにてまへにちんたり
めして女学士と押官とみな名がひえり詩をつくらせて
其なかにてもよき詩をぞ撰しをつけてうたふハこあ
びてありこれをうたふの明文女千餘人をえらぐて別
あれをうたふ撰てりくしはこん乃あそのしごとに
されたる此曲などそ玉樹後庭花の曲又臨春のきよく
とそれ／＼くふおんがく乃名をはけ給へり此曲の
うらみかなしびきん乃ねをはくまうける此に君え

おしいりてこれをもんをきしうたうさひあんがく
なそうしそ衰絃ゆふらんしまそふその夜をあけ
ぬるまで毎月りくとくなりそれ天下の君をもう
人のはまにぞいちうかをかろそうみせぞたんらんな
めぐミ事でしく天下のまつりごとをなさるひ我が
身にあやまちあらん事をおそれ宗ぞしされど書きり
いつく肉ゆたかを女色におごりやりし八山野のかりと
なのミ又ハしそこんとなのしミおんがくなどこのむ
事なの宮川のおのり給ひて一門をしのむさの
なしみうつらず國をかろがろしまた何に陳乃
叔寶とおの宮川のおのみ進を我が身をこうのまゝ

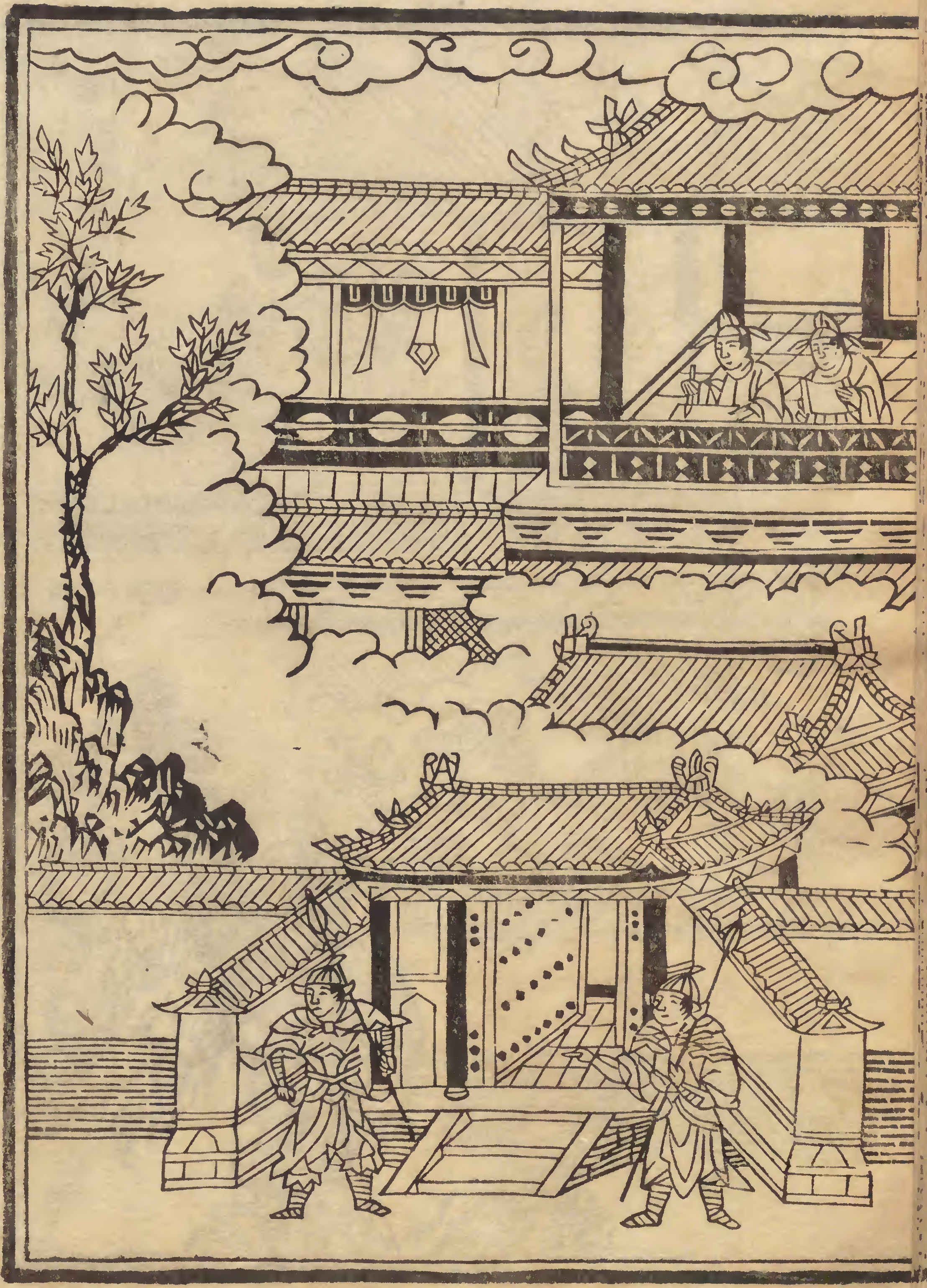
給へど国をおさめたまはん事ありがたし給ふとも
いくてうあかをせよとの給ひき

勇操為記

隋の煬帝とかうして御門一人ありしまうつくしく煬帝
あまりもいかゞもふかざら殺し給ひて宮中にわりかえ
ぶろみ宮殿をいとなみあれを名づけて西苑といふ
されをちぎるうめのひろきすら四方へめぐりまで二百里
ありそのおふ海をもうし海のまはりも十余里ありて又
この海中に蓬莱方丈瀛洲とて三つの山をつくらせ
給ひて東海中の三神山をかたどり山のたかさ百
餘丈あまりの三山の山のうへにたてあをならべて宮殿
をいとなみのきを双べ給ふてみ元をおもし又海より
水のかよひ一川のおりをわりて水をひかさて海へ

そしき海門となおじへ たゞありもなつちし源の
かうに十六とき孫津が孫をはくりあまされ美人
をおきはがりおとに四泉のきよ花をそなへ給へり
海ことにつが孫を花簾にしありしひまくりゆふ
らんありて秋冬の時節よりうりて実前の樹木えな
ちり染地ちあまでしなつちて色乃きねをきり花を
りくりもをはくりてあきれえごにこれとはけて海
ことに春の遊きありて池乃そのかならぬ色のきね
をあち荷をはくりましをはくりて水のおもに花状
うりべ春夏の日れおもくありさしなのの役
かりぬまでありしてはくりて梅のきたかふそれ

禁苑にいでゝ其時々事あるごとへ花を飾りしためし
絵かみ十六ところ乃院が殊くれきさき花を
はくをもとをはくまてあそぶをせんとくはりはくた
かひにられ絵あらそひて君乃みゆきをまちそれぞれ
されハ煬帝乃はゆふらんおしものを事まへうら
おこる事なし世の人ともいまだはあそぶ
ならびして風乃よもとう馬におりおかしく宮女数
千ぎをともなひ舞ひて花にちにゆふらんし
洞にて候せて清夜遊乃歌曲をつくらせはるれ
宮女にて上によみうたはせてせはゆふらんに
むまを新しさてそれより帝は都とやとふろへうろ



くわゆきなされははくはいふらんのはなはたしや
ひさしくくらゐたもつへしとしてはたして国をうし
なひ孫ふはつくあんきうに煬帝乃ため文帝をも
つ孫までよくよくこ乃まつりことおこなひてなからう世をほむる
山乃ごとし煬帝ちゝめ獣王をうてなりて位をせしう
ばゝれざんゑんして太子をころし則くらい
をうそひとりそしめてくらゐをとりさんひて
より国家に賊寇おこくまかを見てたちまち宇挙より
おこり六十あまりをとめてあんぜれは隋乃天下は
わろかりし事ひとつ煬帝乃ひとがのをまもるなれ
文帝乃あやまりなりけり是ハ天下乃君たる人後世

志そんあんらくにして国家長久乃事はおもひ給ふべ
子孫に志めさまうやまひ給ひて儀をりして仁儀
乃みちをまもりておしへをよくよくのこし又さう
徳をくはへて子孫ゑいゐなるへきのちのちへからず
天下をたもつべきを知るべし

剪綵為花
隋煬帝

遊幸江都

随の煬帝あまり遊にふけりこのまれ水上にてさかりて
揚州の江都へみゆきありて世にたぐひなきのあそび
その高さなかなかいやしをおろかなりとてや則ち
乃ちへに宮ちうふかく殿をつくり上中下正殿内
殿ね堂とて三つのぎしきをたてそのかざらせその次
より百二十のつぼねをたてさてそのはしぎを金玉と
もつてかざりをしるしなやうにはくら変化ふ殿宮
ぞんめいせん内侍れ女のおほく所やまて海なりまする
ことにのめされる舟をば名付て翔螭舟やいひて
龍舟よりをすこしきなりといひまゐらせたまへ

苑の中に海ことゝなへ池のめぐりをたりく九
そうれにまありかつけてこれを蓬萊といふこの九
そうの山ハ川まも三重の殿をつくりて離宮の館
をかさだめりその内り数千てうのふ舎もて後宮綵
王公主百官のハほともあのふ舎りハゐまさふこ
八万餘人ミゆく従の衣裳をきそてあくとせんとり
さりのりまさゐまされんびやうども数千そうハ
ふねにのせきみをかうしてミ川ゐか舟ゝり
あかくのふねなれどもそれあとさきにつゞく事二
百余里のあひだよも水のいかめそなくとりそりて又
騎にのりゆくらんびやう出君の御輿ふねをさし

そうミてゆきやうのれきしをいくりとりまら従の
みちも行程五百里のうち國々あまりくまりのん
をよく城をそえ川あその廣き事一列よりを事
百姓あうりまれや立ちのちん家のを城をミてよれあと
らしや舟そ海川ゐ程よせんちうのくゞ飯食ちんふ
川おくしてひはくも事あさえざれぬ地なく
おこれをまそてうりそれ煬帝ハ我が身のとり
のたのしミをおもひ一身ミ百しやうのうまいをおもひ
もかくら宗廟をもなし一身まへぞいまぎ江都より
まんぎよあるべに長安洛陽の二つのみやこをすて
てうり他人にうしなはてうるゐをうしなひふ事

是天下の君さゝく人かゝ見させ給へる所なり

斜封除官

唐中宗と申て御門一人おはしましけるにそのか
ゝり給ひてよりつねに酒このみ女色にふけりまて
国家乃まつりことをも清とめあらす次よりの朝廷
乃しよ色じはあめて給きされ皇后韋氏によう（ら）う
を頼みまひかりまれありしよりてまつりあてもされ
朝廷乃さまよくしをみされぬ様らに韋后れ給もそ
め安楽公主あるじく長寧公主又それいもうと郕国
まへその外宮女上官婕妤ある尚宮柴氏女巫第五英児何
まもけ安か為ちなんじをうしひまゝにして国家
乃官職はかりていかいてうられたり故よ本

よりむかしきうのといへに三十余ねん乃鏡をいさ
せたそうなくみかしと乃はちんをいましめしとし見
鑑後に河りなりとかり天下乃人官をかいらう
おのれ河かうふをあつけて紂封官といふ名を又上官鏡
婦乃姿女あち君乃かゝりとゆかうせられかいはれも
みかふ家をすちいそたき時をかりかへいそのまり人
らん悦あそひぬ道えあくろにまう跡てうつなり
かやうまことりよ河りぬ道とよはかろりとかむる
人ハ紂し姪よなんみん姿女あち乃神鐵の紀むり
ましけれそこ色ろしろりかくらえらりれあり時
も色とゑんかさえかありなり併らくまれをあん

と國ふ中宗ひさしく武威が乱あみあひたゞめぐくひん
官ふなしきかんなんをいとひ共とりしもはあふ
まうんをえそくうぬえしはうせのふゆへみそかふ
あう經ゆうのをみして宗範よ好りり海しまを極へ
天下れを河ところりふして天をおそれくをのそ
都しいまさらく臣を見ける章房刑まをとなへし
えゆくきえりしこくおうひぬ道六らまちむあしくあり
経ふ海ことらみぜんしやの乃うは河が人をてあそうしやの
いましめさうとうやそれ天下乃君あら人中宗を
あ河くかり見とと云べし

斜封除官
唐中宗
韋后
婕妤
安楽公主
長寧公主
鄭国夫人
上官婕妤

観燈市里

唐の中宗末年のころ天下のまつりおとろへて男女に
まよひ換ては男もよろく縁のかりひまなくにしてあけ
くれゆふらんをたのしみ給へりある時正月上元は
乃夜をもつて帝きさき韋后をともなひあそばせたまひて
ひそかに禁中をしのびいで市町乃ちまたにいでゝ燈籠
を御覧じて御なぐさみと志給ひけりそれてんかの
君たる人ハ万乗のくらゐをふみ九重の
うちにおはしますべきをしのびてゆふらくをいざ
志むなしいきんや中宗ハ一たび天下の乱をまねきて
とまたそのうへ八どもまれよるをつけて候べし

たまりかねさしも天子みづからをりて市町へ
よるのひそかい御ありきなさることもありてかくのごとく
此ゆふらんしたまひ所きさきをともなひ給ひせず
事これあんのいかれぞや一つみだりにいきれ給は
うちひ二つりかちゑをくろおして三つりは天下の
法度をなおり宮門みだりんられぬひとひとおほせ
仕宮門のいましめをきれぬ唐の中宗は宮門の
いましめをゑぶりかぶり城をもめ給ふ事これなき
世のかゞみなり

帝鑑圖説巻第十一終

帝鑑圖說卷第十二目錄

寵幸番將　唐乃玄宗
斂財後貴　唐乃玄宗
便殿擊毬　唐の敬宗
寵信伶人　唐乃莊宗
上清道會　宋乃徽宗
應奉花石　宋の徽宗
任用六賊　宋乃徽宗

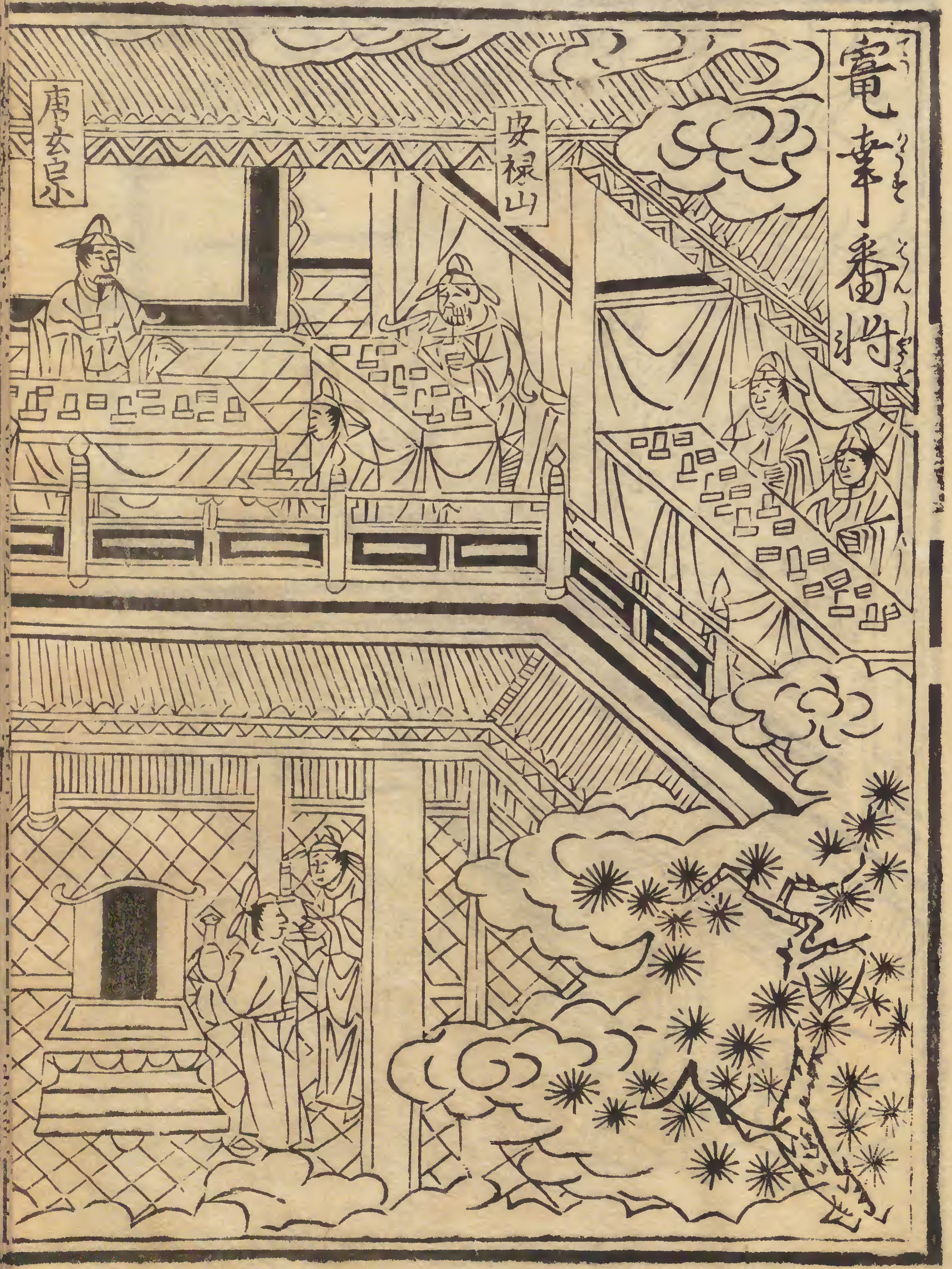
帝鑑圖說巻第十二

寵幸番將

唐の玄宗皇帝と申して御門一人おはしましける時
ひとりの胡人ありその名を安禄山といふ玄宗これを
寵したまひふかく范陽といふところの節度使にな
され又御史大夫までのしよくをつかさどらせたまひ
なりしかば安禄山しんたいおほきにこえて腹
たれてひざをすぐれりけるハぶちなりてゐふしてむ
かうちハおどりたんありさま玄宗のまへにていを
御後おくさまを世話のならひもあんじがちなれ中
みやいつわりをのくありまれたかく俗おわきこり

こんなるぞ禄山このよしうけたまはりおもはれけるはちや
まうちは達べきれがしがふくちうにおもひかれなる物
きはいかゞはかりけるをもがはのこ玄宗へさうし申されて
はよろこびもうけたまはりて文をさゝげ宮中へいでゝ
いりきぬるに御前にまゐりはせ給ふおりふし玄宗楊貴妃
もおかしぎざしきに酒もりもよほされて禄山すゝみいでゝ
まづ楊貴妃をみらいちらいして申さり玄宗猿らい
ならいまこのゆへをさがするに玄宗楊貴妃と御てう
あひより海をゆへまづ楊貴妃をこうやまひて玄宗は
ればわがことぞおんがなあとうや玄宗かく
ゆへきたるしとされてはふしんありおぼしめし御

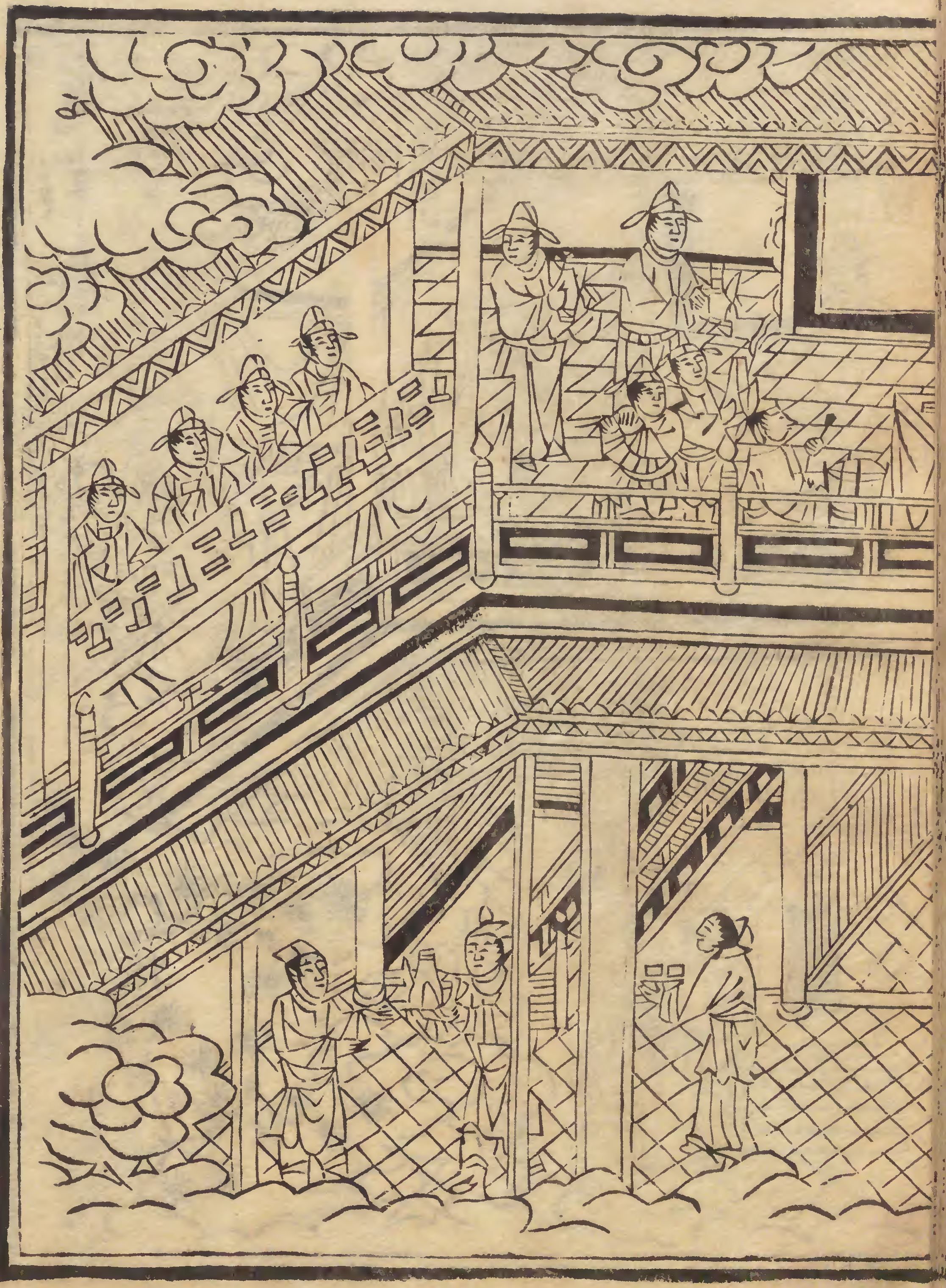
禄山にとゝをたまはりひさしかりけまづ楊貴妃とらいちらい
あつて申さぎれまれなりやまふりなれいかなる事ぞと
とひたまふ禄山こたへて申さくそれが國乃
ならひにてまづ母をうやまひて父をのちにいたし
らいもとにおいていへるとらい申してつかへまつりちゝは
はかりなかりしをいままた申しあげるとは玄宗これが
いりなか事のきもおもしろしめされぞしてはよろ
こびまし海せり文あるとき玄宗勤政楼にのぼり玉ひ
ひでならんかいかなる下をあるめみぎまくにちん
ざらせまひてはさかりのいなかるかきもひがしれ
かさみだれまひて金雞の障子をたつまへ御坐を定め
まうそかまへくなりしかの時おほせ乃御せめて安禄山をせむ



りろく乃陛下のうゑ座をしりぞけなくも
ほまへれみをあげさせ給ひて禄山をうちつづけて
清物かくさまなされたりあつ時張九齢と申す者玄宗を
諫めるも安禄山がていを見まいらせてふうあるを
むほんをなすべきものとぞんじ候へり御所にも
うちをさりぞけましくて二つびちの時は御不審
うらぎるべきよしいさめたてまつりけれども玄宗
耳に入まし海さずいよいよ禄山を重付給へり末は
禄山むほんをおこし唐の天下をうばへりと申す
玄宗張九齢がいひしことをおもひいで後悔し給ひて
あつさみ海しまゐらせんとて表などを甚くはあらさらん

斂財侈費

唐の玄宗皇帝たからものをこのみたまひて財宝を
あつめ給ふ事あまたなる中にも天下のものあつめられけり江
淮といふところより韋堅王鉷とて二人の者あり
きうが禁中へさいはいとしてさまざまのたからをその
まいらせ給ふよし天子くはんきよのうちにまゐらせり毎年百
姓のざいもつをうばひとり我が君へたてまつりて
君をよろこばせ申さんとてまいりあつまるふねを
浮くり滻水をひいてそのみちとなし江淮のふねをあつめ
めそかのみちにうかべさせ望春楼へめしよせしに
毎てまつり所よりまいらせまいらせ又あらそひふたゝ



数百億をはうりてくのたうろの家の財浚撒
縣といふ所の崔成甫といふ者をめしいだされけるか
げりをしかうゐにあげられあまたのちまたをさ撥
な孫乃おもてにさくせく珍宝乃うつくしさをうさせ文
美人百十人ゐつびならべ御らんじけるがさら楽てとゞまく
ふうさ状うさ楽ゆくしかバあまりさ政を玄宗に
叡覧なされていよいよ喜びおごりもいやまし後に望春
樓乃うちにて一日きぬをんなもまと参らし王鉄ハ
毎年ひとまいのふりて銭をきぬと百億万銭を
たて君へもてなしにまつりあれどもおく百姓の
ざいほうをうばひとりて君へたてまつりけれども

玄宗うくとふたうしあまされ也すぐれ天下れざい
ほうハ下ざんらんまいて酒遊か御うみおかきとの
やうんとはくらりあふし召されたり後う金銀をも男ん
給ふ事ハふんとあのごとくにおもられたうられより
たく民百姓みなくひんうまかくてたくさう
らんとゆらうしてて天下地うかひかこざれたりされど
玄宗皇帝ハうらなよはゝせ給ひてよりことをせず
うらハ錦と綾金をとうしたいくまをたうと楽
給ひしうども御ふかハよく緑おごりいよくたん
ふまよひたいぐもなきのませ給ひたり故に安禄山
天下ハらんをおこして玄宗うらあをうしなひ給ふ

なりまさく城より出あんぜれどみざ新く事もなさ
まる事をもいでまうりおごるとおごらざるとの
うちうりはりさればてんかの君なる人もよく慎く
たしなみしるべき事なり

便殿撃毬

唐乃敬宗皇帝とてみかど一人おはしましけるに
敬宗は政ごとなくさて遊ぶ事のくいものごらく
日をまで見けりしといへどもよろづ朝しみまふち給
もなく毎であけくれゆふらんなどの戯ひて
内殿りしみゆきなされ劉克明といひ紀臣してるま
乃毬をうち又かたちらゆるくまげんなる御はげぐ
みをうちあへるとみやりしひまなるにあそひ中を
とろうあうとうや又錢をもりくちうろおろ人を悩
といあけくれうまらとめしつま遊ばさひ高祖談より
糧なとう危そぐ傍ミと志入ありまたよろうされど百官

公卿の人々てうちまへ臨み毛毬しけるをとゞめ申
さんさん海しまた事もかしうゆへよろしからず
ぬらぬことをうしとそなたてまつりて毛毬し給ひ
人もかしこきは御かはむかんあそりて敬宗位をとうし
給ひ給へりされど敬宗皇帝ハきゝとられ聡明のきこえ
ありてそのちゑふかくしてよろしく幼少の時
かくらんせさ給ひハゆうによりて小人にまどはされて
あくざやくぶへうりしありさまにてはしりてあん
まれてんう年にほどなく事くるしからん乃
ありけり

寵信伶人

唐の敬宗皇帝と申してみかど一人おはしまし
けるこの敬宗皇帝よく音楽にたんじて音の事を
しろしめしつねにあんがくをこのませたまひて
まい日かくありめでたまひてあまたに伶人とめして
きはめて一人おもしろきかどてうあいのあまりさうしぞ
しうちありけれども伶人をなぐさめさせけるに
よそをもひのほかけんをあたへて御てんのうちに
あらためてまいあそびたまひしかばおもしろくみえまい
けんどもみなこれをせうしたまへり天下のもの
をしうしもよくしりたまへれてみなまなびつけて

李天下といふあまりの伶人まいぢんた宮中へいぞ
いりあ士大夫をそしつまゝうありて大将をざんそうし
みかどもの事は海ことゝなるらんやをあざむけり士
大夫をうとみ諫臣をあくまゝあさひろうかふかゆへ
ふしんうあちさゝはうらみあてまつりをそうむ
かんせられさそあちまち君をいこ滅しうのあん
がくのごうだをあけめくききうの志がしれうんへうり
つゝ史をよりて後きにまりそれ荘宗皇帝をはじめ
かんあんをつくして數度のかいせんを勝しあまつさ
へてき城をおとして天下をとうせにまふといへ共
うく滅をよりひまくにしてまいうまをつゐそめ給ふ

後へ伶人の爲にからりてわざそうをまつりがまい
までのとき勝給ふぞうつめしされそまでんうれ君
あるへもかゞみとなべき事とうや

寵信伶人
唐荘宗

上清道會

宋の徽宗皇帝とて御門一人おはしませり此徽宗常に佛法をきらんじたまひてまづあたらしく文殿をたて名づけて上清宝籙宮といふ此宮にゆるく林霊素といひし僧を召されて師とかしづかれ徽宗もとも小清をなされ師と仏をもてあがめたまふ又は仰せ出して錢三百貫づゝ下されたり此会を名付けて千道會とやありけれ肉あまされかんにんきせんの人をあつめめうがく文へいれさせ給ひて林霊素に經文をとさりをてちやうもんせさせ給ひ又徽宗も霊素がまへにむかひ高座よりおらせ給ひてちやうもん

なされのひめりをしけれハふしんなりけるにや林素が前
ゐん人ハおきらハちらいさ歟一ことえせらる御かたに林素
せいちやうの中ざまうすなどをいひまれたちやうきん
乃んて一度ふどいゆきうひとまり君臣同坐ありまし
ゆりていくしを乃まへぎるしそれより徽宗を名付て
教主道君皇帝といふ　これで徽宗ハ天下だんこんれ
君として王法のさぐしきをもて仏教のよろこぶとも
ちらさがひこぶりにかんめんにおしけりあれかさ仏
を閉給ふ事見まざりひれをとひありあの時徽宗ハきき
乃すにみかりなされ給ふ時ふ里よみわざまよひとがさ
なり五国城と云所ふてはてさせ給ふみむなしくなり給へり

應奉花石

宋乃徽宗皇帝は給ふ花木とあやしき石をあつめて
みちをたのしませ給ひけるとき蘇州乃朱沖か
いひし者みづから花をこのミ石をあいするの風給ひて
方々よりもとめさせ給ふ中に此うけたまはりて
花石をもとめ我か君へたてまつらんとて其かうら
浙江といふ所へいたりあやしき石をもとめて
徽宗へたてまつりけれハいらんおほしくてはなはだよろ
こび給ひぎりにそれよりして年々手ごとにうけて
花石をたてまつる後にハ淮水汴水の二川の水よ
花石の綱とこそいへどもハなんしをたゆめのへそ

むかし又蘇州のうちより應奉局とて花石をあつむる
ところをこしらへ朱冲が子朱勔に仰せつけられて
花石乃ぶぎやうをせさ務者となり朱勔君の仰せを
うけ奉りつゝ所々にあけくれ花石をもとめ諸国の山乃
おくうしろの壁ぶれうちにさんさんさまざまの海
までのこらずゆさぶりて蘇州へ人のふねにてうち
ふ石や花木のおりくるを朱勔此堂に一本ゝゝのれであまた
者の人をひきてはこびしも遠きなりちもの花をしにして
かの珍ふいうつりかれみちとのあり珍あつりとて石や
花木銀ゐりなどしの波をこうぐちうさを被ふりて花
石どもここひまろとりや又高山乃うへなどに見えたと

此の石乃ゐ道でもちかくれば人をたよをして舟までを
くりしつ城うめて車をとりくひ絶よたり又河乃
水ちなりにより石のありなれえいうかとふりしと
いゐなり務しくのそうりでとをなめくらして田ひ乃
まくにとりいうしつ花きをへ命そまり海殺よ民
百姓あけられ食く水はかられて田をうるを者うへを
ひまをなくみなくひんくなりくうしまって数や
子をうりなとして食うくいのちをはぐ族くり
まれゐ此のゐこれなまもいまごありかくぶちう乃ゆゑ
なれで食うてむかんおそうりくれどなくむかしも
おりもふ

應奉記石

任用六賊

宋の徽宗皇帝は代々太平のみよをつぎてことさら奢
たまへこそ金銀さいほうにいたるまでほしみさかり
き事はかぎりなし蔡京とて一人のしんかあり
君の意をさとりやまと奢をひとく窮おしへらるによ
給ふ故に蔡京がいせひのほどよにならびなかりけり
あるとき蔡京王黼といふものをすゝめまゐらせて毎
日ゆさんにひまなし何るとき徽宗に諫くれ
しんかなるありめしつかひて忠臣なさけなきふると紀
王黼よりあしさまにさうざさをいひてさうらひてしん
かりしめしてのこるひとかたちは海ことなりぬる所

さりながら太祖よりはこうと伝せられたる蔡京うけ
たまはりもちゐ中あけくれきゝ天子にとり
とれくろゐりおしくてあまり跡くてんかうた
からのはそてまわる事それかぞさらにはなし
がくしものゆゑなんぞものもさうしきなりさりつめ
我の内あ太祖よりは家形どくてかのさ持統ふれ
いりなりん徽宗又あわ叟まつハ我がちくはらゐ
ふおしま叟しと記すうしをうて方はゆゑ跡ふは
ざまいれ建ざりは事とそありくいさめをなせと
こく蔡京申し名あさされたる人の中し事も海こと
ふいりりかわしうおうも海こ呼く志てこまふ匠

からぞ多く　どふもかくよろ君はれひみゆのゝ綏猶ひ
て御なすくはゝを志のふ居り徽宗皇子よりと旦右毎日
はさんをこのゝ蔡京にわざり給ひて人乃孫を聞給
りぞ蔡京又わろこふ法度を立て民の財宝をうぞひ
元来一人の宝とし又ひろく宮殿をはくりて是より
ゆふらんをもくめぐり延福宮と申す毎物かきふ御殿
改たて又甚かくさうふ御所をつくりて景霊法と名づけ
たく山をときはきて艮嶽と名づけいくぞく金銀を
つみやもてる甚数はらふそうらせぐらし光これ毎それ
宝をうばひ元てかく此蔡京は又ごら叟給ふ故よ民
百姓渇然くくにをとろへて君をうらみさそまうり

天下に乱をおこさんとあけくれ思ひゐたるところに徽
宗かくのごとくあそびをこのみ玉へれば折をえてしばしば
いよいよゆふらんはひまぞなし又蔡京をうやまひ給ふ
ゆへいよいよくはしくなる事なし故に蔡京がいせいは
されど天下皆これにしたがへばおそれはゞかる者なく
みならず又梁師成李彦此二人はそのほか宝ぶぎやうを
ゆるせたまふ又朱勔と花石をいだすぶぎやうより王黼
童貫此二人も敵をせめおこさをふせぐ大将となる
天下みんなとしすべて此六人の者を名付けて
六賊といふいつれもあくぎやく無道なる事ハ申もおろか
なりとうやそのうち蔡京と六賊のかしらなり此六

人ハ君ども〳〵君をすゝめさせてまつりて宮苑をとゝのへ
ゆふらん遊たのしみ是にふけりて民百姓君にそむ
きたてまつり靖康乃とし金といふ国より
せめのぼりやうやうへせめ入徽宗父子をいけどりて北方
に害したてまつる是をあんずるに六
賊乃すゝめによりて徽宗いやしくも無道にてましまさに
いはんや蔡京がおこなふあくぎやく無道の臣下
ありて君をすゝめ申故いよいよおこたれけるよく
政かまんおごりとあんくむ是わざはひをまねき天下
大乱のもとひとなりされば孔子ものたまはく一言より
ちかく国をうしなふものあり是忠臣乃諫を君用ひ
道をいはしめて諫なき家を亡し忠言耳にさかふと

いかなる徳をさいはひをえなとうや又侫臣乃言ハ一
うんはかなふふせいへなぜまざまひれぞといふ
それ天下乃君たる人これを能くさとりて常に忠言を
きゝなば天下太平にして長久乃みよなるべし

帝鑑圖説巻第十二終

慶安三甲寅年三月中旬
洛陽三条寺町下本能寺前
八尾助左衛門尉開板

日本政府圖書

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan